



Artist : J.J. Cale
Album Title : Naturally
Label : Mercury
Release Date : 1971

実はアメリカの音楽のアイコン的存在だったJ.J.ケール。 レイドバックという言葉が似合うサウンドを永遠に

J.J.ケールの音楽は、レイドバックという言葉そのものだ。歌いかたは、いつもメロウ、パッションはあるが、いつも落ち着いている。そして彼のギターも音符が少なく、シンプルに聞こえる。まるで、やる気がないように聞こえる時もあるが、それが彼の求めているサウンドだろう。シンプル、飾りがない、ストレートで直正な音楽。彼のレコードは焦ることがない、永遠に続く砂漠の夕焼けみたいだ。僕が担当しているインター FMの番組「LAZY SUNDAY」では2007年、番組が始まった一日目からJ.J.ケールをかけている。リラックスしたい時、ちょっと怠けたい時にはぴったりの音楽だ。そして彼の音楽は、いいワインのように、慣れるとおいしさがわかる。そんなJ.J.ケールの世界に入るためには、彼が1971年に発売したデビューアルバム「ナチュラル」がおすすめだ。このアルバムには彼のクラシックソングが何曲か入っている。

J.J.ケールは知る人ぞ知る、アメリカの音楽のアイコン的ソングライターであり、ギターリスト、ボーカリスト、プロデューサーである。彼自身が発売したレコードはそれほど売れなかったが、彼の曲をカバーしたアーティストは、彼の曲でたくさんのヒットを飛ばしている。そのリストの中にはサンタナ「センシティブ・カインド」、マリア・マルダー「ケイジャン・ムーン」、ランディー・クローフォード「ケイジャン・ムーン」、ポコ「マグノリア」、リナード・スキナード「コール・ミー・ザ・ブリーズ」、ブライン・フェリー「セーム・オールド・ブルーズ」などがあるが、きっと彼のテーブルにイチバンたく

さんの美味しい物をのせてくれたのは、エリック・クラプトンだろう。J.J.ケールに言わせると、クラプトンのおかげでこの30年間食べているというほどだ。クラプトンが初めてソロアルバムを出した時、J.J.ケールの曲「アフター・ミッドナイト」をカバーして、その曲をシングルカットした。その後、クラプトンは彼の「コケーン」もカバーして、その曲のおかげで、クラプトンの1977年のアルバム「スローハンド」がビルボードのチャート2まで上がった。そういっても過言ではないはずだ。2006年には二人でデュエットアルバムも出している。今年クラプトンが発売したアルバム「オールド・ソック」にも彼の曲「エンジェル」が収録されている。クラプトンは生きている人で、一番尊敬しているのはJ.J.ケールだと言っている。そして、あのロックの変わり者スーパースター、ニール・ヤングさえ、彼にとって、一番のギターリストはジミ・ヘンドリックスとJ.J.ケールだと言っている。だけど、いくらいろんな人が彼の曲をカバーしてヒットを出しても、J.J.ケールのオリジナル・バージョンを聞くようになれば、カバーを聞かなくなっていくだろう。

残念ながら、飛行機に乗るのが苦手なJ.J.ケールは、日本には来ていない。彼のインタビューもあまりないので、彼のことを知りたければ彼の音楽を聴くしかない。今年の7月26日にJ.J.ケールは74歳でこの世を去ってしまった。僕も一回はライブを観てみたいと思っていたけど。

PROFILE ジョージ・カックル◎1956年鎌倉生まれ。日本人で日本舞踊の師匠の母とアメリカ人でヨットマンの父を持ち幼少時代を日本・テキサス・韓国で過ごす。小学3年生でビートルズに開眼。LAで有名なサーフポイントでの初サーフィン体験。この原体験が彼のその後の人生を決定付ける。日本での学生生活の後、憧れのインドをはじめ世界を放浪し、ハワイ経由でサンフランシスコに移り住み18年間波乗り明け暮れた。1995年帰国後、生まれ故郷鎌倉へ音楽マネジメント&制作会社を立ち上げ、日本のミュージックシーンにbabamaniaなどを輩出。音楽プロデューサー、コラムニスト、作詞家(マッドカプセルマーケッツ、阿川泰子など)として、2006年の8月には子供の英語・音楽教育用の本『ウクレレ・マミー・アンド・ミー』を出版。古今東西の音楽と文化と人間臭さをこよなく愛し日本と世界を結ぶ架け橋になりたいと願い、今日もボブ・マーリーを聞きながらサーファーとしても多忙な日々を送っている。現在、インター FM(76.1) 毎週日曜日、9:00 ~ 13:00 レイジーサンデーを担当。

SHONAN BEACH FM 78.9 STARLIGHT CRUISING Thursday 8-10pm